

特集へこねる

## 思索の時間

加藤 喜道

土を練る

掌で包み込んで 身体の重みをのせていく

かたまりを押しつぶしては 持ちあげ

また押しつぶす

土の硬さ揃え 整えていく作業

私の手のなかで

土は静かに息を吐きだす

土を練る

幾重にも折り畳まれた土のなかから

遠い昔の記憶が甦る

土のなかに封じ込められてきた

記憶の地層を掘り起こしながら

ゆっくりと土をこねる

そして ロクロの上に土を据える

新しい記憶を生みだすべく



ロクロの好きな女の子がいる。

粘土の場を開いたものの誰も集まってくれず  
所在なげにしていた私のところに遊びに来てくれ  
た。

ロクロを動かしてみる。私の手が土を伸ばして  
いくのを驚いたように見つめている。

「ようし お茶碗でも作ろうかなあ」そう言って  
いくつか形を作っていると

「私もやってみる」と椅子に座ってきた。

「手に いっぱい水をつけて」「ロクロをまわす

よ」「さあ どうぞー」

くるくると回りだした粘土の固まりに 女の子

は おずおずと手を伸ばしてきた。

指のあいだを 掌のなかを 土がすべり抜けて

いくのが なんとも楽しそう。

自分の手のなかを流れていく土の感触を 静か  
に確かめているようだった。

そのうち女の子は なにか違うという顔をし  
た。やがて顔をあげ「お茶碗を作る」と言った。

「さあ どうぞ」

私は 女の子が土とどのように向かいあうのか  
を楽しみにしていた。好きなものを 好きなよう  
に作るのだと思っていた。

けれど 女の子は私の手を取って「お茶碗を  
作って」と言った。

見本が欲しいのかなあとと思い ひとつ形を作る

と ロクロの上で回っている茶碗に 女の子は静

かに手を添えた。

柔らかく ほんとうにいとおしむかのように茶

碗の輪郭をなぞっていく。

ロクロに初めて触れた人ならば 誰でもそう

なのだろうけれど 回転する早さに指の動きが合

わせきれず潰してしまうことが多い。ロクロと息  
を合わせきれずに 自分の思いが先行してしまい

がちである。

女の子は違った。

くるくると回転する動きに逆らうこともせず  
従わせることもせず 土の動きと呼応しあつて指  
が形を追いかけていく。

上から下へと 下から上へと。

そして幾度か手を動かしたと 嬉しそうな声

で「できた」と笑った。

それが 女の子の粘土への向きあい方だった。

それから「大きい湯呑を作る」「これくらいのお皿を作る」と言つては 私に形を取らせては

「できた」「できた」と いくつも作り続けた。

そんなことを何度繰り返しただろう。

ある日 いつものように私に形を取らせて湯呑  
をひとつ作りあげた。

「今度は なにを作ろうか」

湯呑を切り離し 私が声をか  
けた時には 女の子の手は 口  
クロの上にあつた。

回転する土を柔らかく捕ま  
えて 円の中心へと静かに指を落  
としていく。ゆっくりと ゆっ  
くりと。

形の無いところから作りだし  
ていくのは初めてのこと。女の子が なにを始め  
ていくのか 私は どきどきしながら見つめてい  
た。

女の子の瞳は まっすぐに口クロに向かつてい  
る。

土のなかに眠っているだろう 遊びやら 憧れや  
ら 希望だとか そんな記憶達と 楽しそうに話  
し続けている。

自分のなかにある形を捕えようと指を動かす。



「いま この時」の思いを粘土に置き換えて、なにかを生み出していく。

ものを作ることは、こんなに素敵なことだったんだ。なにかを表現するということは、こんなに楽しいことなんだ。それでいて厳かなことだったんだと、私は改めて気付かされた。

やがて女の子は、ゆっくりと顔をあげた。

「できた」と言って、にっこりと笑った。とてもきれいな笑顔だった。

この時の彼女の笑顔を、私はずっと忘れないだろうと思う。

私の仕事のなかで「こねる」ことは、ただ単にロクロを挽くための準備段階だと思っていた。ひとつの作業として捕えていた。

けれど「こねる」段階から、ものを作るということが始まっているのだろう。

出会ったものを受けとめて、繰り返し繰り返し自分のなかで咀嚼していく時間。

自分自身の記憶と対峙させ、自分の中へ新たなものを刻みつけていく為の時間。

それが「こねる」ことなのかもしれない。

形を作るのは、時間にすれば、ほんの一瞬のこと。けれど、その一瞬の時間を支えるためには、広大な、深い時間の森が必要になる。

彼女の森を育てたのは、繰り返し形をなぞっていた時間だったのかもしれない。

形をなぞり、指を動かしていくなかで、彼女の森は枝葉を繁らせ、地中深く根を張らせていった。

そしてひとつの木を空へと伸ばしたのだろう。

「こねる」とは、手が行う思索の時間なのかもしれない。